

# 猪犬の頂点へ 新たなる地平を目指して③

田宮 治

## ガチンコ勝負

誰よりも遠回りして、悪戦苦闘の末にやっとのことで掴み取った自己流猪猟と、自作猪犬の一流芸を、山彦会千葉支部の若者たちになんとか受け継いでもらいたくて必死で頑張ってきたのである。

その気持ちも、推し進める猪猟道もようやく分かってきたようで、山彦会千葉支部では、どんな猪が獲れ、堂々と勝負ができるまでになってきた。

若者らしい元気で突っ走り、何も言わなくても、思い思いに自分のやるべきことをきっちり実践している。見事な連帯プレーや突っ込みまでも実行できる実力にまで成長し、今では安心して見ていられるようになった。

何がなんでも、若者たちを頂点

に立たせたくて、独断専行で「俺

流」の押しつけだったが、誰一人文句も言わず、よく耐え、覚えてくれたものだ。そんな最高の気分になっていった二月六日(土)、ついに「その日」がきたのである。

いつものように、猪山を二分する県道を走っていた車が突然ストップ。運転していた支部長の北嶋氏が飛び降り、猪の通るいつもの渡りに向かった。

「田宮さん、来て！」と叫んでいる。

見ると、なんと道路のアスファルト上に、今しがた渡ったばかりと思われる大猪の泥の足跡がくっきりと残っていた。北嶋氏はもう

猪が獲れたような笑顔で、「今朝だよね……」と言うので、「今朝どころか、今しがたのもので、追われて動いたものだ。すぐあの辺にいるよ。これはいたただきな」と

笑いとばす。

北嶋氏は親方も板についてきたようで、すぐに今日のメンバーである平野氏と加藤氏を呼び、その場で作戦を立てて指示している。

私は指示どおりに犬たちをどう掛けるかを慎重に考えていた。猪が逃げ込んだ山は、以前にも何度となく狩って知り尽くした山である。ここは一番、大峰筋を流すことで、必ずその下の谷で咬み止めさせないことには勝負にならない。

もし、大峰を越えてしまったとしたら、大山に続くので一枚くらのタツでは張っていないのと同じである。

いくら追われ慣れた大猪でも、真っ昼間で、すぐ後ろに追手がいるわけでもないのだから遠くまで逃げるはずがない。

「よし加藤氏も一緒だ。ちょう

どいい機会だから、ガチンコ勝負といくか……」と決心していた。

かねてから、この時がくるのを心待ちにしていたのである。それこそ、この時のために私のできる最高の猪猟をすべて出して、彼らにくいほど説明してきたのだ。

私の経験からすると、猪はあの大峰を越えていない。

相談役の平野氏には、この県道を左に入る道、つまり大峰を回り込むように上っている道に、移動タツを張ってもらい、犬たちが絡み落とす猪に寄り付いて撃ってほしい。

そして、勢子は三人で一緒に狩り進み、犬たちの寄せ鳴きによって、どこまで効率的な攻めができるか、まさに独自で判断、実行してもらいたい。

北嶋氏も、当然そこまで分かっ

を立ててくれた。犬たちはヨシ号、マロ号、シロ号で、一〇〇\*。かなりの猪ならば必ず咬み止める一流芸の三頭である。何も心配はいらないし、止め撃ちの最高技術が体験できるはずだ。

幸いなことに、平野氏は私と同じ年のベテランで、三枚分ぐらいのタツは見事にやり遂げてくれるだろうし、また加藤氏は今猟期のラッキーボーイである。猪を獲るには最高のメンバーである。

つまり何十人もグループ猟にも勝る力となる。これが止め犬による真の単独(二、三人)猟であり、最も気楽にして、一番良い猪猟であると言いつつ、上り詰めてきたのである。

この猪は、第一戦でブイ号、カツ号、武蔵号の必要な狩り込みを見事に抜け、堂々と県道を渡り逃げ切った一〇〇\*。かなりの猛者と見た。

「追われ慣れたこの猪こそ、ちよほど良い腕試しになる」と、そんなことを考え、みんなで談笑しながら昼食をとり、つかの間の英気を養った。

## 大勝負の始まり

さて第二戦の始まりである。

既にタツを抜けた猪は、すぐには追わず、少し時を待つのがポイントである。そうすれば、猪は遠くに逃げず近くで止まっているものだ。

平野氏を農道の草地に残し、三人で猪の入った山を回り込み、大峰筋にある登山道の入り口で車を止めた。

「さあ行くぞ。行って来い！」と、犬たちを送り出し、それに三人が続く。

この大峰は小道が続き、とても狩り良いこともあって、猪はよく獲られているが、たまに入っていたとしても小物だけである。しかし、今日は目的がはっきりしている。止まっていると思われる所までは、山並みと犬群の動きを見ながらの、のんびりとゆっくりの狩りである。

木の葉が落ちた頂上の峰伝いを歩くので、見慣れた景色も格別で、なんともいえない良い気分になる。

これから始まる大勝負とは裏腹に、まるでハイキングのような楽な気持ちで小道を歩き、反対側の山並みを見ながら、「今度あの大峰から攻めるのもいいなあ」などと、次なる狩り場の話をしながら、大峰筋を目印としたナラの大木の近くまで来た。

犬たちは既に猪臭を取り、山中ほどをせわしく狩り進み、ナラの大木より下に続く出峰に近づいて来ている。

「下で見当を付けた猪の居場所は確かここだったよね……」と二人に言うと、そこまでは考えていなかったようで「そうだね……」と、曖昧な返事が返ってきた。

「おかしい」  
その出峰を犬たちがどんどんと上って来るではないか。そして三人の後ろを突き抜けて、反対側に直進して行ってしまった。

その動きは、まるで猪を追っているような速さだったので、「出ますよ」と二人に念を押したが、心の中で「しまった、また早立ちだ！」とつぶやいていた。  
というよりは、右下に潜んでい

た猪が、山の下でタツを張る平野氏と私たちの動きを察し、小峰を上って大峰を突き抜け、左側に避難したのだ。

左側に逃げられてしまったのは、その先が大沢であり大山に続くため、完勝はまずもって無理なこと、一巻の終わりである。

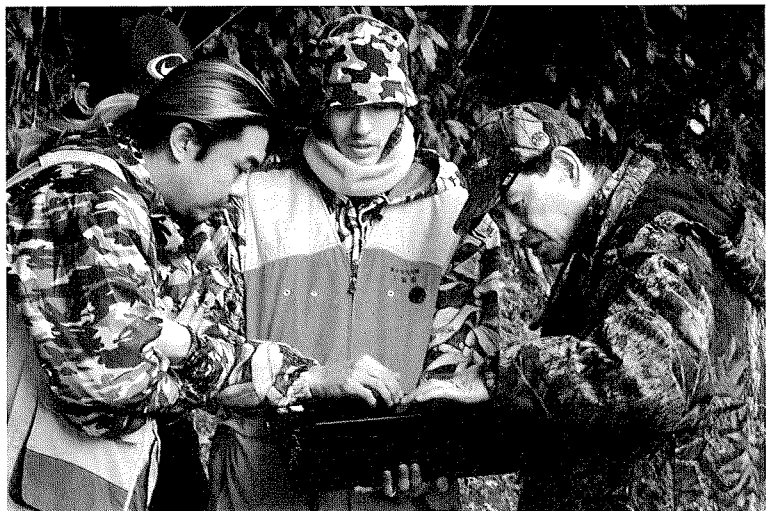
二人に「左側だぞ！」と注意して攻めの覚悟を促す。その言葉の終わらないうちに、ヨシ号とマロ号が凄い威嚇で居竦めている。

「出たぞ！」  
しばらく待っていると、シロ号も加わった見事な谷落としての連続鳴きになった。

山々に響きわたる素晴らしいワーン、ワン、ギャン、ギャンの絡み鳴きが、下に下にと落ちていく。「しめたぞ！ これは大沢まで下りない。すぐ下の小沢の始まる所あたりで止めるぞ！」

そう思って二人を見ると、北嶋氏は犬たちの鳴き声の真上から直球勝負に出ようとしている。  
そして加藤氏は、後ろに飛んで一本後ろから下りる小峰に向かっている。

納得の一番、会心の一撃。「これでどうだ。何か文句あるか……」。  
実に見事になったものだ



進化のGPS。俺の十年を返せ！（出猟直前の打ち  
合わせ。北嶋、加藤、棟方の各氏）

「よし、それでいい」

三方から猪を挟み込む、いつもの作戦を何も言わないのに素早く実行している。

このような状況判断が正確にできるまでに成長した二人を見て、俺だって遅れをとってなるものかと、大峰筋を七〇ぶくらい全力で直進する。犬たちの鳴き声の上を通り過ぎ、その先を断ち切るように下に落ちていく小峰伝いに飛び下りて行った。

こうなったら、横に逃げられないように、一気に大沢まで突っ走り、小沢伝いに落とされて来る猪をなんとしても俺が食い止めねばならない。

「よし、いただきだ」

急な小峰をわざとバリバリと音を立て、猪の逃げ道を断つように飛び下りた。今度は犬たちの鳴き声が左横下に聞こえる出峰の上に出た。犬たちはすぐ下の真竹藪と大杉林の中に小沢の始まる凹地で、ワン、ワン、ギャン、ギャンと大激戦である。

千葉はどの山でも猪はこんな真竹藪か、篠竹の中にいる（加藤氏）



どんな荒猪でもびくともしない。必ず見事な谷落として小沢できちっと止める(ヨシ号、マロ号、シロ号の一芸)



撃ち終わった猪に、まだファイトするマロ号(赤)、ヨシ号(黒)とシロ号。撃つ前は危険で写真を撮れない

既に移動している大物であるにもかかわらず、五〇号も走らせない完璧な咬み止め芸である。マロ号たちは咬み込んだままで鳴く「ガオッ、グオッ」という独特の鳴き声まで出しているのに、大物特有の牙を鳴らすガチャ、ガチャ音がない。牝猪であると見た。

「よし、いただきだ」と思い、現場に飛び降りようとして周りを確認すると、なんと北嶋氏が止め現場のすぐ上に寄り付いている。

北嶋氏の様子から、犬たちがよく見えているらしく、杉林と真竹の中に目立つオレンジ色のベスト姿が全く動かない。そのすぐ前の止め現場は小沢の始まる所で、山肌が急に崩れ落ちた凹地になっているので、上から攻めている北嶋氏は安全である。

速さと攻め方まで基本どおりの素晴らしいものだ。

「よしよし、その調子だ。あと一踏ん張りだ」

本来ならば、ここで「それ、頑張り！ ジジが来たぞ！」と、突撃の合図を犬たちに大声でエールを送るのだが、今日は止め現場に



いつ、いかなることが起ころうと「不動の犬群の力」となるよう出番を待つ若犬。千代号の仔で、左から小太郎、リオ、タイショウ、ヤマ、タツの兄弟たち

一番乗りしたのは北嶋氏である。

いつものように私が寄るのであれば、文句のない咬み込みみである。どんな乱暴な突進であろうと、大声で怒鳴ろうと、犬群は平気である。元気づくことはあっても、戦力にはなんの影響もなく、必ず撃ち獲れる自信がある。

しかし、寄り付いたのが主人でないととなると、犬群の反応が少し気になる。

ここでは、そっとしておくのが一番良いと判断し、北嶋氏にゆっくり勝負してもらうことにした。

犬群はますます元気で、そんな心配もふっ飛ぶ凄さになっている。

多分、加藤氏も向こうの小峰からこの現場を見守っているに違いない。真剣勝負になったこの戦いで、各自がそれぞれの立場で上手に攻め切れるように成長したのが何よりもうれしい。

ここは二人を信じ、必ず撃つてくれることを願って「頑張れよ！」の声をぐっと飲み込み、一気に小峰を走り続けた。

「北嶋君、俺が小沢の下で移動

**スポーツミックス**

20kg 5300円 7.5kg 2880円

ドッグフード1袋が全額を支えます

ドッグフードのご注文は全額へ!

タツを張るまで、もう少し撃つなよ……」と思いながら、やっこのことで猪の逃げ道を断った。

「よし来い！」と銃を握りしめ、万一の場合に備え、北嶋氏から逃げて来る猪を待ち構えていた。

その時である、待ち望んだ一発が山々に響き渡った。急に犬たちの鳴き声が変わり、一斉に咬み付いたように少し静かになった。

### 見事な狙い撃ち

私は猪に命中したことが分かってほっとした。念のため「どうなった？」と無線で確認すると、「撃つた、撃つたよ！」と大喜びである。私は自分が撃つた時よりもはるかにうれしくて、「よくやったなあ、良かった、良かった」と褒めちぎった。

そして、平野氏に「北嶋君が撃ち獲ったよ」と無線で告げようとしたが、山の裏側なので電波が入

らない。仕方なくタツをほったらかしにしたことを心で詫びながら、北嶋氏の待つ現場に駆けつけた。

そこに加藤氏もいて、ニコニコしながら勝ち戦話に盛り上がっている。私も感心して「そうだろうよ。私も感心して「そうだろうよ。よく待って狙い撃ったね。犬たちが食い下がっているの、どう犬たちをかわして撃つのか心配していたんだが、見事そのとおりで、その時が一番良い撃ち込みのチャンスなんだよ」と、絶対にこの戦い方を忘れないように念を押し

た。北嶋氏が犬の前で「ありがとう、よくやってくれた」と、犬たちを撫で回している姿を見て、ここまで気がつく猪獵人に成長したのだと思い、ガッチリと握手をして、心から「おめでとう」と言った。

少し落ち着いてきた頃、北嶋氏は猪との攻防を笑顔で話し始めた。

「狙い続けていたが、犬たちが咬み込んでいて、とても撃てなかった。そのうち、猪が自分に気づき、強力な犬たちの咬みを振り払うように暴れ、犬たちを引きずって二層もある凹地を飛び上がった。突いてくるように首を大きく突き出してきたので、そこを撃つた」

なんととも言えない良い笑顔であ

に、「私のリーダーは七十三歳だが、実に凄い。私も年をとったらあんな獵人になりたい」と話したと、いつかの打ち上げ会で言っていた。

どうも本気のように、どんな時でもよく学び、一生懸命で手抜きをしない。そのうえ英語が得意で、喜びが最高潮の時は英語が自然に飛び出すほどだ。

アメリカから犬の動向が一目で分かるナビ（GPS）を全員の分まで取り寄せ、さらに取扱説明書などを日本語に訳して猪獵の進化に努力してくれている。

かつて、私も文明の利器としてドッグマーカーを取り入れたことがあったが、その器を使いこなすのに何年もかかってしまったことを思い出す。今ではマーカーを片手に、どこまでも猪の止め現場を追い、突き止められるようになってたが……。

そんな苦労した何十年も、ナビを使えば、その日から犬たちの動きが一目で判明できるのだ。

## 勝負の一戦

話が横道に逸れたが、私が言っておきたいことは、今日の一戦の戦いぶりが証明している素晴らしき若者たちの努力と成長である。もう誰が見ても、一角の猪獵人である。

基本から順次きっちりと向上心を持って努力し、本気でやり続けていたからこそ、わずか一秋（一獵期）にして、ここまでこれたのである。

はつきりいってしまえば、目指す頂点だって、すぐそこである。その頂点も、順次高く追い求め、時をかけて、最高の頂点までなんとしても行きたいものである。

まさにこれからの一戦一戦が上級編で、上達への大事な勝負の一戦なのだ。

（つづく）

SHOOTERS JAPAN  
銃跑年鑑 '10 & '11

定価3000円（〒5000円）